ヤ

矢川澄子（やがわすみこ）　一九三〇～（昭5～）　詩人、作家、評論家、翻訳家。東京に生まれ、東京女子大学英文科、学習院大学独文科卒業後、東京大学文学部美学美術史学科中退。一九六〇年代末から文筆活動に入り、同時に、英仏独の翻訳も手がける。詩集『ことばの国のアリス』（一九八〇）、小説集『架空の庭』（七四）、エッセイ集『私のメルヘン散歩』（七七）のほか、訳書にギャリコ『雪のひとひら』（七五）、チムニク『タイコたたきの夢』（八一）など多数ある。（若林ひとみ）

八木橋雄次郎（やぎはしゆうじろう）　一九〇八～八三（明41～昭58）　詩人、教育評論家。秋田師範卒業後、旧大連市で小学校教員。石森延男らの「新童話」に参加、文学活動に入る。処女作の小説『空拳』を経て、『解氷期』『馬群』『年輪』などを発表。滝口武士らの詩誌「鵲」に寄稿、詩人としても注目された。同地での著書に、童話集『南瓜と兵隊』、詩集『鷲』などがある。終戦後帰国（四七）、児童文学への再出発として『みどり色の地図』（五〇）を出版。検定小・中国語教科書を編集、多くの教材を執筆した。（栗原一登）

ヤーコブレフ　ユーリイ・Я　Юрий Яковлевич Яковлев　一九二二～　ソビエトの詩人。レニングラードのサラリーマンの家に生まれ、小学生のころから詩才を認められ、学校の壁新聞に詩を載せていた。第二次大戦中の一九四一年、小学校（一〇年制）を卒業後すぐに前線に出た。この体験がのちの作品に影響を与えることとなる。作品は、動物を主人公としたもの、淡い初恋もの、戦争を主題としたものの三つに大別されるが、日本では初恋ものの『初恋物語』（七四）、『美人ごっこ』（七八）が有名である。（宮川やすえ）

矢崎源九郎（やざきげんくろう）　一九二一～六七（大10～昭42）　言語学者、翻訳家。山梨県生まれ。東京大学文学部言語学科卒業。専門の言語学研究のかたわら、豊富な外国語の知識を生かし、北欧の作品を中心に数々の翻訳を手がける。児童文学でもアザールの『本・子ども・大人』（一九五七）のほか、コッローディ『ピノッキオ』、ラーゲルレーヴ『ニルスの不思議な旅』、アンデルセン『絵のない絵本』、『グリム童話集』など、多数の訳書がある。（若林ひとみ）

八島太郎（やしまたろう）　一九〇八～（明41～）　画家、絵本作家。本名岩松惇。鹿児島県に生まれ東京美術学校

©1988　日本児童文学学会

を中退、プロレタリア美術運動に参加。漫画を描く。運動中に結ばれた妻*新井光子(画家・本名智江)と一九三九年渡米、開戦後、日本での迫害体験を記した絵物語『あたらしい太陽』(日本版七八)を発表。情報機関に属し、日本兵向け投降勧告ビラを作成。戦後もとどまり、日本の辺境の子を題材にした絵本『*The Village Tree* 村の樹』(五三)、『からすたろう』(七九　絵本にっぽん大賞)、『*Seashore Story* 海浜物語』(六七)などのほか『あまがさ』(日本版七五)、『モモの子ねこ』(同八一)などでアメリカ人の感動を呼ぶ。　(宇佐美　承)

安井小弥太(やすいこやた)　一九〇五～八五(明38～昭60)　童画家。滋賀県に生まれ一九二一年ごろ北野恒富に師事、美人画を学ぶ。三一年「*コドモノクニ」に執筆以来「乗物画報」ほか各社各誌に執筆、機関車など精緻に調査、線描を主とした正確な表現でこの分野の先駆的第一人者となる。四三年ごろ鉄道省嘱託にもなったが七五年病を得、執筆を中止した。東洋陶磁会会員としてその方面でも著名。地元大磯町の文化財保護委員、社会教育委員なども務めた。　(久保雅勇)

安　泰(やすたい)　一九〇三～七九(明36～昭54)　童画家。茨城県に生まれる。一九二七年日本美術学校卒業。このころから「*コドモノクニ」に童画を描きはじめる。三二年に松*山文雄らと新*ニッポン童画会を、四六年に武*井武雄、初*山滋らと日本童画会を、六四年にいわさきちひろ、滝*平二郎らと童画ぐるーぷ「車」を結成し、日本の童画の発展の中で重要な役割を果たした。画風はしっかりしたデッサンに基づく動物を描くことに特徴があった。　(松本　猛)

矢玉四郎(やだましろう)　一九四四～(昭19～)　児童文学作家。大分県別府市に生まれ、千葉大学工学部卒業。一九七四年の『おしいれの中のみこたん』がデビュー作。八〇年九月刊の『はれときどきぶた』は、斬新な発想から成るナンセンス・テールで、子どもたちのクチコミによって広まり、ベストセラーとなった。続く『あしたぶたの日ぶたじかん』(一九八五)、『たまねぎ博士1号タリラン』(八六)なども好評で、子ども読者に強く支持され、八〇年代半ばの児童図書出版界に矢玉現象ともいえるブームをもたらした。　(関口安義)

八波則吉(やつなみのりきち)　一八七六～一九五三(明9～昭28)　国文学者、国語教育学者。福岡県生まれ。八波孫四郎の三男。東京大学国文科卒。一九〇一年に金沢の第四高等学校教授。一六年に文部図書館に入り読本の改正に尽力。一八年から使用されはじめた国定第三期『尋常小学国語読本』(『ハナハト読本』)を編纂。その教科書は、在来の大人本位(理論主義)のものから、児童本位(心理主義)のものへと革新されていた。好評で併用の修正本を退け、ついに全国の採用を勝ち取る。二〇年に熊本の第五高等学校教授となり、各種の読本を編集し、多く

©1988　日本児童文学学会

の著書を残した。『尋常小学国語読本要義』(一九一九)、『創作への道』(一二一)、『読本中心国語の講習』(一二二)、『第二国語の講習』(一二四)、『読本中心国語教育概説』(一二四)、『読本中心創作本位の文章法』(一二五)、『国語教育大道』(一三三)、『読書に依る情操陶冶』(三八)など。教育随想が三冊。物語や絵本の創作単行本が約一〇冊。「少年倶楽部」への寄稿も多い。

(弥吉菅一)

柳内達雄(やなうちたつお) 一九一一〜七八(明44〜昭53) 教育評論家。東京神田生まれ。青山師範卒。「綴方行動」の吉田瑞穂に触発され、都会的感覚の学級詩集を多く出し、百田宗治の激賞を受ける。藤田圭雄主宰の「赤とんぼ会」の幹事として多くの児童文化人を集めた。山本有三監修の国語教科書の編集員。日本作文の会常任委員、世田谷教育委員会・都立教育研究所での「花」「教育じほう」の編集や有三青少年文庫での読書指導は著名。『私たちの詩と作文』(一九五七 産経児童出版文化賞)、遺稿集『花』(七九)ほか著書多数。

(佐藤辰雄)

梁川剛一(やながわごういち) 一九〇二〜八六(明35〜昭61) 画家、彫刻家。東京美術学校彫刻科卒業。彫刻のかたわら、青少年向けの雑誌の挿絵を担当。ことに山中峯太郎『敵中横断三百里』、江戸川乱歩『怪人二十面相』など、スリルとロマンに満ちた世界を描き、当時の少年たちの人気を集めた。『世界偉人絵本』シリーズの人物画でも知られた。彫刻では、長崎・グラバー邸の蝶々夫人像が有名である。一九七三年、日本児童文芸家協会の児童文化功労者に選ばれた。画集に『梁川剛一挿画大集』(一九七五)がある。

(磯貝勝太郎)

柳田国男(やなぎたくにお) 一八七五〜一九六二(明8〜昭36) 民俗学者。兵庫県に生まれ、第一高等中学時代新体詩人松岡国男として世に知られた。東京帝国大学法科大学政治学科に入り、草創期の農政学を学び、卒業して農商務省に入った。農政学開拓の功も大きい。累進貴族院書記官長になったが、議長徳川家達と合わず下野。国際連盟委任統治委員会委員、朝日新聞論説委員も務めたが、後半生四〇年は民間で独力日本民俗学の樹立に尽瘁し、ユニークな新しい学問を創設した。『定本柳田国男集』全三一巻、別巻五巻(一九六二〜七一)に著作は収められている。その広汎な業績中子どもに深くかかわるのは、大正期にはじまった手毬唄の収集と整理、これは『民謡覚書』(四〇)に入っているが、ついで昭和に入っての全国方言の研究が早い。子どもの虫や草花の呼び方に注目し、命名の心理に分け入っている。『蝸牛考』(三〇)、『方言覚書』(四二)にまとめられた。『日本昔話集』(三〇)は全国の昔話を集めて子ども向きに書いたもの。流麗な筆は少年少女の心に深く根を下ろした。そしてその内容は、『桃太郎の誕生』(三三)などの分析・考察を導き、民俗学の一つの大きな柱となっていった。子どもが使う日常のことばの価値に目覚め

©1988 日本児童文学学会

よという、『小さき者の声』(三三)、子どもに直接そのことをいう『少年と国語』(五七)は、国民に思うところを自然に語らせようという、『国語の将来』(三九)などの国語教育刷新論と一連のものである。子どもの遊びの起源と諸相を分析した『子ども風土記』(四二)は、大人に開眼を求めたものだが、戦時中の学童疎開の子どものために書いた『村と学童』(四五、のち『母のてまり唄』と改題)は、その淋しい心を慰め、この機会に在地の人の暮らしをよく見ておけと励ます慈愛の書で、戦後の小学校社会科と国語科改革のための教科書編集へつながるものと考えられる。

(益田勝実)

やなせ たかし 一九一九～(大8～) 漫画家、イラストレーター、詩人、作家。本名柳瀬崇。高知県出身。東京高等工芸学校卒。日本橋三越宣伝部員を経て一九五三年フリーの漫画家に。児童関係の仕事も多方面。NHK漫画学校(一九六五～六七)、詩『てのひらを太陽に』(七一)、編集「詩とメルヘン」(七三～)、「いちごえほん」(七五～八二)、絵本『アンパンマン』(七三)など。日本漫画家協会常務理事、日本青少年文化センター理事、日本童謡協会理事。父親は初期の「少年倶楽部」編集長。

(永田桂子)

柳瀬正夢(やなせまさむ) 一九〇〇～四五(明33～昭20) 漫画家、画家。本名正六。愛媛県松山市生まれ。六歳で畳大の鐘馗を描き、一六歳で個展を開き、「光と風の流れ」が第二回院展に入選する。一九一九年五回目の上京をして永住を決意。二〇年読売新聞社に入社し、議会で政治家の似顔を描くが、その漫画を認めたのは有島武郎だった。二四年「文芸戦線」に加わり「無産者新聞」に関係するようになる。二六年下川凹天(へこてん)、宍戸左行、村山知義らと日本漫画家連盟を創立する。「無産者新聞」の政治漫画や、それを描きつつ三〇年「読売サンデー漫画」に色刷りコマ漫画『金持ち教育』『パン太の冒険』を連載する。三二年検挙、投獄。三三年仮出獄。松山文雄らと風刺画研究会をつくる。三七年ごろより「コドモノクニ」「子供之友」に夏川八朗の名で挿絵漫画を執筆しだす。四五年五月二五日疎開先の長女を見舞うため新宿駅に出かけ空襲にあって被弾、即死。研究書に『ゲオルゲ・グロッス』(二九)、画集に『柳瀬正夢画集』(三〇)がある。

(石子 順)

梁田 貞(やなだただし) 一八八五～一九五九(明18～昭34) 作曲家、音楽教育家。札幌市に出生。一九一二年東京音楽学校声楽科を卒業。在学中から、歌曲『昼の夢』などを作曲していたが、一三年北原白秋の『城ケ島の雨』の作曲で一躍名を表した。ほかに、『とんび』(葛原茵詩)、『どんぐりころころ』(青木存義詩)、『お玉杓子』(吉丸一昌詩)など、童謡というよりも子ども向きの唱歌を多くつくり、ことに葛原茵とのコンビが多い。東京府立一中の音楽の教師を務めて多くの俊秀を教え、

©1988 日本児童文学学会

また成城学園、玉川大学に教鞭を執った。（金田一春彦）

ヤネチェク オタ Ota Janeček 一九一九～ チェコスロバキアの画家、イラストレーター。プラハ芸術工業学校卒業。一九六〇年代から海外でも認められ、六三年サンパウロ・ビエンナーレ展（イラスト）での金メダルなど内外の賞を受けている。自然を詩的、幻想的に描く抒情派であるが、児童本、教科書の挿絵でも有名。日本でも八一年個展を開き、『おやすみなさいのうた』（一九七二）という子ども向けの詩にイラストをつけた本などが出版されている。（保川亜矢子）

ヤーノシュ Janosch 一九三一～ ドイツの絵本作家。本名ホルスト・エッカート。現ポーランド領シュレジアの寒村の出。正規の美術教育はほとんど受けていない、破格の独学の人。最初の絵本『ヴァレック』（一九六〇）を出すまでは錠前工をしたり、織物工場でテキスタイルの下絵を手がけたりしていた。現在では一〇〇冊もの絵本作品があり、国際的にも一〇〇万以上の読者を勝ち得ている。色彩の美しさは抜群。天衣無縫、なりゆき任せともみえるストーリーの展開の中に、一貫して弱者の側に立ち権力に疑問を投げかける作家の姿勢がうかがえる。主な作品には『おばけリンゴ』（六六）、『ヨーザとまほうのバイオリン』（六一）、『ねえパパは熊なんだよ』（七七）など。成人向きの小説作品も二冊ある。また作家自身の最も快心の仕事とするものに『*Janosch erzählt grimms Märchen* ヤーノシュ、グリム童話を語る』（七二）があり、いわゆる児童文学の枠組みに収まり切れぬ人柄をしのばせる。（矢川澄子）

矢野龍渓（やのりゅうけい） 一八五〇～一九三一（嘉永3～昭6） 政治家、小説家、ジャーナリスト。豊後国佐伯（現佐伯市）生まれ。本名文雄。父は佐伯藩士。一八七三年慶応義塾を卒業、郵便報知新聞に入社、社会改革を唱える論説を書く。のちに同社社長となって立憲改進党結成に参加、外交官や大阪毎日新聞副社長になった。『斉武名士経国美談』（一八八四）は、紀元前四世紀のギリシア、テーベの志士たちを描いた長編小説で、とくに青年層に愛読された。のちに『世界歴史譚』*の人選にも影響があったと考えられる。『報知異聞浮城物語』（九一）は、日本の志士たちがインド洋めざして南進し、浮城艦に乗ってインドネシア各地で原住民側の味方としてオランダ軍を打ち破るという小説である。内田不知庵らの「小説の資格なきもの」という批判から論争となったが、南進の主張と戦略戦術の詳しい記述が大衆に歓迎された。『海底軍艦』にはじまる押川春浪*六部作は「その腹案は『浮城物語』に負うところが少くなかった」（福田宏子）という。（勝尾金弥）

藪内正幸（やぶうちまさゆき） 一九四〇～（昭15～） 画家。大阪に生まれ、一九五九年大阪府立夕陽丘高校を卒業。

©1988 日本児童文学学会

その後上京し、出版社勤務を経て、動物を専門に描く画家となる。画風は観察に基づいた精緻な描写に特徴がある。主な絵本に『くちばし』(一九六五)、『どうぶつのおやこ』(六〇)、『しっぽのはたらき』(七二)、『どうぶつのおかあさん』(八一)、図鑑に『鯨類・鰭脚類』『世界哺乳類図説』などがある。七三年度朝日広告賞第二部グランプリ受賞。(松本 猛)

藪田義雄(やぶた よしお) 一九〇二〜八四(明35〜昭59) 詩人。神奈川県小田原市に生まれる。法政大学英文科卒業。一九一八年より北原白秋の門に入り、三〇年には白秋秘書になるなど白秋より多大の影響を受ける。処女詩集『白沙の駅』(一九三八)をはじめ、『藪田義雄全詩集』(七八)のほか、『北原白秋と私』(七八)、『評伝北原白秋』(七八 増補改訂版)、『わらべ唄考』(六一)、『わらべ唄風土記』(六七)などがある。(桜井信夫)

山縣悌三郎(やまがた ていざぶろう) 一八五八〜一九四〇(安政5〜昭15) 教育者、出版人。近江の国水口藩生まれ。数え年一〇歳にして藩公の前で『論語』『日本外史』を講じた。東京遊学中には自然科学書を読みふける。一八七九年東京師範卒業。愛媛師範の校長を経て西村茂樹の勧めにより文部省御用掛となり、学習院講師を兼ねる。主として小学校教科書の編纂に従うが、かねてより希望していた欧州留学が実現せず、学習院教授への道も可能性がないことを知って、八六年官を辞す。同年から翌年にかけて上梓した『理科仙郷』一〇冊は大好評を博し、以後、仙郷学人とも号するようになる。八八年には少年園(のち内外出版協会)社を興して雑誌「少年園」を創刊するが、「小国民」(のち「少国民」)と並んで我が国における本格的児童雑誌の嚆矢となった。また、堺利彦、幸徳秋水らと交際し、フィリピン独立の志士を援助して当局の監視を受けたこともある。著書に『小学校用日本歴史』(一八八八)、自伝『児孫のために』余の生涯を語る』(一九八七)などもある。(上田信道)

山川惣治(やまかわ そうじ) 一九〇八〜(明41〜) 絵物語作家、画家。福島県郡山市に生まれ本所小学校を卒業後、川端画学校を経て日本大学芸術学部美術科に学ぶ。この間紙芝居の制作貸し出しを業とする。戦前より「少年倶楽部」などに作品を発表しはじめ、戦後『少年王者』(一九四七)、『少年ケニヤ』(「産経新聞」連載)といった大ヒット作を生み出す。一九八三年に一連の作品が角川文庫に収録されて注目を浴びた。(藤本芳則)

山口将吉郎(やまぐち しょうきちろう) 一八九六〜一九七二(明29〜昭47) 画家。山形県鶴岡市郊外の旧士族の家に生まれ、少年時代の学業は抜群であったが、官途につくことを嫌い、絵画に親しんだ。親の反対を押し切って上京、東京美術学校に入学(一九一五)。美校では日本画科の結城素明に師事。一年に在学中、武者絵を描いて当時最高の権威ある帝展に入選。将来、日本画壇を担う逸

©1988 日本児童文学学会

材と嘱目された。日本画の制作のかたわら、同人誌、機関紙などに絵筆を振るった。「少年倶楽部」の人気挿絵画家高畠華宵が講談社と訣別(一二四)すると、その代わりの一人として迎え入れられ、「少年倶楽部」新年号(一二五)に初登場した。その後高垣眸の『龍神丸』と吉川英治の『神州天馬侠』の挿絵を同時に描き、精度の高い細密描写の挿絵画家として一躍寵児となり、四四年、講談社より野間挿絵奨励賞を受賞。ほかにも「日本少年」「少年世界」などを舞台に息の長い活躍をした。歿後に『山口将吉郎画集』(一九七五)が刊行されている。

(高橋康雄)

山口勇子(やまぐち ゆうこ)　一九一六〜　(大5〜　)　小説家、児童文学作家。広島市の出身。広島女学院専門学校中退。戦後に原爆孤児の救援活動に参加したことから、〈戦争と人間〉のかかわりを題材・主題とする創作をはじめ、広島の同人誌「子どもの家」に参加する。主要な作品に、『少女期』(一九六九)、『貝の鈴』(七〇)や、『かあさんの野菊』(七四)、『人形マリー』(八〇)、『おこりじぞう』(八二)などがあり、いずれもが〈戦争児童文学〉として、注目・話題作となった。それらの作品は、戦争体験をした人間たちが、平和と幸福を願う心情を、デリケートにも切々と表現することを通して、戦争がもつ悲惨さと非人道性とを、鋭く浮き彫りにし告発するというのが、特徴的な作風を成している。現在は東京都内に住み、原水爆禁止日本協議会筆頭代表理事として、精力的に反核運動に参加しながら、日本民主主義文学同盟に所属して、創作活動を続けている。『荒れ地野ばら』(八一)は、第一四回多喜二・百合子賞を受けた。

(渋谷清視)

山下喬子(やました きょうこ)　一九二二〜　(大11〜　)　児童文学作家。東京生まれ。東京府立第四高女卒業。「文芸首都」に拠って作家を志し、その後、丹羽文雄の「文学者」同人となる。一九六一年戦中のニューギニアの少年と日本の将校との友情を描いた『プフア少年』によって講談社児童文学新人賞を受賞。以後児童文学作家となるが作品の数は少ない。主な作品に黒人との混血少年を主人公にした『ポールのあした』(一九六七)、夜間中学生を描く『陽は夜のぼる』(七一)などがある。

(西本鶏介)

山下明生(やました はるお)　一九三七〜　(昭12〜　)　児童文学作家。東京生まれ。幼少年期を広島県の能美島で過ごす。京都大学仏文科卒。児童書編集者となる。同人誌「こだま」で、乙骨淑子、奥田継夫らを知る。一九七〇年、はじめての本『かいぞくオネション』を刊行。『うみのしろうま』(一九七二)が野間児童文芸賞推奨作品に。『はんぶんちょうだい』(七四)で小学館文学賞。画家杉浦範茂との絵本『まつげの海のひこうせん』(八三)で絵本にっぽん賞。『海のコウモリ』(八五)で赤い鳥

©1988　日本児童文学学会

文学賞受賞。山下の作品には、いつも、海が描かれ、海辺で暮らした子ども時代が描かれる。『うみのしろうま』では、くだける波頭が「白馬」にたとえられ、「白馬」のイメージが重要な役割を果たすが、このような「隠喩」が作品の核心をつくっている例は、ほかにもある。『ふとんかいすいよく』(七七)では、六畳間に敷き詰めたふとんが、『うみをあげるよ』(七九)では、青いバスタオルが「海」にたとえられ、見立てられている。他の作品に、『島ひきおに』(七三)、『いきんぼの海』(七六)、『ダッテちゃん』(七七)、『はまべのいす』(七九)、『屋根うらべやにきた魚』(八一)、『お父さんのかさはこの子です』(八四)など。詩情あふれる文体で、幼年文学に独自の世界を拓く。チゾン&テイラー作『おばけのバーバパパ』(七二)など、翻訳の仕事もある。

(宮川健郎)

山下夕美子(やましたゆみこ)　一九四〇～　(昭15～　)　児童文学作家、東京に生まれる。中学時代はバレーに熱中し、文化放送の子ども番組『おとぎのロケット』にもレギュラー出演する。高等学校卒後、伊藤道郎芸術学院に籍を置き、舞踊の道を志す。一九六三年結婚、広島へ移住。六五年広島児童文学会に入会、同人誌「子どもの家」に作品を発表しはじめる。同誌第一一、一二号に載った。『二年2組はヒヨコのクラス』(一九六八、単行本として刊行)で、一九六七年度の日本児童文学者協会短編賞を受賞する。この作品は、広島の中学校を舞台にした話で、多感な六人の中学生たちが織り成すドラマをオムニバス風に語ったものである。『ひろしまのオデット』は、白鳥姫オデットを踊ることを夢みていた少女が、原爆をテーマにした創作バレーの主役に選ばれながらも、なかなかなじめずに悩む話。主人公の久美子は、「ヒヨコ」こと担任の山田ひな子先生が原爆病院に入院した恋人を追って広島にやってきたという話を聞き、自分もがんばろうと思う。原爆という重いテーマを扱いながら、その文体はあくまでもリズミカル、かつ活発で、その視点の新しさが高く評価されたといってよい。そしてそのさわやかな遊び精神は、『ごめんねぼっこ』(六九)にも受け継がれる。幻想的な「ぼっこ」とわんぱく夏平との交流は、児童文学における空想の領域をひとまわり拡大したものとして高く評価できるものである。

(細谷建治)

山住正己(やまずみまさみ)　一九三一～　(昭6～　)　教育学者。東京に生まれ、東京大学大学院人文科学研究科博士課程修了。現在、東京都立大学人文学部教授、教育科学研究会委員長。小学唱歌をはじめ音楽教育の問題から幼児文化、教育史、教育問題、教科書問題に至るまで幅広い研究、著述活動を行っている。主な著書に『日本の子どもの歌―歴史と展望』(一九六二　共著)、『唱歌教育成立過程の研究』(六七)、『日本教育小史』

©1988　日本児童文学学会

（八七）など多数ある。

（大畑祥子）

山高　登（やまたか　のぼる）　一九二六～（大15～）　児童図書編集者、版画家。東京に生まれる。終戦翌年創刊の児童雑誌「銀河」*の編集にはじまり、その終刊後『世界の絵本』シリーズを手がけるなど、戦後の児童出版文化の担い手を果たした。その後一九五三年まで出版の仕事を続ける。この間、三七年ごろより木版画をはじめ、東京の市街風景を郷愁的に描いて知られ、雑誌「びわの実学校」*（一九六三創刊）の表紙絵を終刊号まで担当。版画技法は、独学で極めたといわれるが、編集者時代の画家との交流、絵本での印刷技法の経験に学んだ。

（中村悦子）

山田健二（やまだ　けんじ）

山田耕筰（やまだ　こうさく）

©1988　日本児童文学学会

山田三郎（やまださぶろう）　一九二七～七九（昭2～昭54）　画家。東京に生まれる。人形工房を経て、人形劇団プークの再建に参加、人形劇、人形映画の仕事に従事する。その後児童出版美術の世界に入り、絵本や挿絵の仕事をする。ラチョフやブルックらの絵本の影響を受けて、しっかりした動物のデッサンに基づいて擬人化した作品を描いた。主な絵本に『きつねとねずみ』（一九六七）、『三びきのこぶた』（六七）、『かもときつね』（六二）などがあり、神沢利子『ちびっこカムのぼうけん』（六一）につけた挿絵は傑作といえる。（松本　猛）

山田美妙（やまだびみょう）　一八六八～一九一〇（明1～43）　小説家、新体詩人。江戸神田生まれ。父は旧南部藩士。一八八四年大学予備門（一高）に入学、幼少時より面識のあった尾崎紅葉らと翌年硯友社を結成、機関誌「我楽多文庫」に拠った。その後「都の花」を主宰し、「国民の友」ほか各誌に風俗小説、歴史小説、社会小説、時代小説を次々と発表し、明治二〇年代初頭の流行作家となったが、やがて硯友社同人とも離れ、失意のうちにがんで死亡した。しかし、その言文一致の理論と実践が、我が国の近代文学史上に残した影響は大きい。児童文学では『少年文学叢書』第五編『雨の日ぐらし』（一八九一）がある。得意の平易な言文一致体によって、一〇歳の少年の冒険心を描いた『糸犬一郎』や、イギリスでの騎士物語『君子の腹』など短編四点と『無いものづくし』など詩四点が収められ、その文体はほかの作家によい刺激となった。ほかに「幼年雑誌」にも執筆しているが、ほかの硯友社作家に比べればずっと少ない。（勝尾金弥）

山田　浩（やまだひろし）　一九〇七～四五（明40～昭20）　作家。本名久寿郎。出雲市生まれ。島根師範卒。一九二九年成城学園赴任。佐藤惣之助に詩を学び、詩集に『林檎を射る』『平原の児』。紀元二千六百年芸能祭入選の児童劇『夜明けの子供』は四〇年筒井敬介演出で劇団東童が上演。成城学園で上演の脚本集『おにやんまの誕生』（一九四一）。小説『潮村少年記』（四二　文部省推薦）は長橋光雄脚色、筒井敬介演出、東童公演（四三年帝劇）、小説『碧雲寮』（四三）はその続編。（田島義雄）

山田みのる（やまだみのる）　一八八九～一九二五（明22～大14）　漫画家。本名実。東京美術学校西洋美術科を卒業した後、東京漫画会の会員になる。「朝日新聞」に岡本一平、服部亮英らと所属し家庭子ども漫画を描いた。大田三郎らと『ヘボ画集』（一九一二）、美校同期の服部亮英と『子子漫画』（一四）を刊行する。達者な線と誇張された人物像とが動くようにみえる漫画を描いたが、三六歳の若さで死んだ。本人の著書としては漫画漫文集『漫画双紙・酒の虫』（一八）があるだけである。（石子　順）

山手樹一郎（やまてきいちろう）　一八九九～一九七八（明32～昭

©1988　日本児童文学学会

53）小説家。本名井口長次。栃木県に生まれ、明治中学を卒業。一九二三年、小学新報社発行の「少女号」の編集に従事したのち、博文館に入社、児童雑誌「譚海」の編集長を務めた。三三年、『一年余日』が大衆文芸の佳作入選、以後山手樹一郎の筆名を用いた。長谷川伸に師事、四〇年の『桃太郎侍』の人気で時代小説作家としての地位を確立した。作品の特色は、明るくて健康な明朗性にある。（磯貝勝太郎）

山中古洞（やまなかこどう）　一八六九～歿年不詳（明2～?）　日本画家、挿絵画家。本名舛（のぼる）。旧姓佐藤。東京に生まれ大蔵省に出仕、のち画家生活に入る。月岡芳年、在原古玩などに師事。一八九五年内国勧業博で「清正進軍之図」褒状、九六年読売新聞に入社し挿絵担当。一九〇一年鏑木清方、鰭崎英朋ら青年挿絵画家と烏合会を結成。児童向け挿絵の仕事として、博文館の「少年世界」や巌谷小波のお伽噺類への執筆がある。著書『挿絵節用』（一九四一）は幕末・明治期の新聞・雑誌挿絵の歩みをつづったものとして貴重。（渡辺圭二）

山中恒（やまなかひさし）　一九三一～（昭6～）　児童文学作家、評論家。北海道小樽市の生まれ。小樽中学、神奈川県立秦野高校を経て、早稲田大学第二文学部演劇科卒業。早大童話会で鳥越信、古田足日、神宮輝夫らと「少年文学宣言」（一九五三）を発表。同人誌「小さい仲間」の創刊に加わり、長編『赤毛のポチ』を連載、同作で一九五六年児童文学者協会新人賞を受賞。卒業後、百貨店宣伝部画工室に勤務、六〇年から著述に専念。六〇年安保闘争をめぐる政治的立場の違いから、日本児童文学者協会を退会。六八年、佐野美津男らと六月社を結成、ミニコミ紙「児童図書館」を発刊する。七八年、『山中恒児童よみもの選集』全一〇巻で第一回巌谷小波文学賞を受ける。六〇年以降の山中恒の活動は、子ども向けの創作をはじめ、評論、子ども史の研究、テレビ台本執筆など多方面にわたる。その主力である創作では、戦後日本のリアリズム児童文学の記念碑的作品といわれる『赤毛のポチ』、大人社会と対抗しながら自立する子どもを描いた『とべたら本こ』（六〇）、『サムライの子』（六〇）、『天文子守唄』（六八）、『ぼくがぼくであること』（六九）などが代表作。『転校生』の題名で映画化された『おれがあいつであいつがおれで』（七九「小6時代」連載）も話題を呼んだ。愛国少年として教育された作者自身の体験から「子どもたちに魂の自由であることのすばらしさを語り続けたい」という姿勢を貫くと同時に、通俗を恐れずに物語の面白さを最優先しているのが特徴で、現在、最も多くの読者をもつ作家の一人である。体制順応に終始した戦時下の児童文化を、膨大な資料を駆使して徹底的に批判した『ボクラ少国民』全五部、補巻一（七五～八二）は、昭和の子ども史の欠落部を埋める労作。『子ども

©1988　日本児童文学学会

たちの太平洋戦争』(八六)はその大要をまとめたもの。

［とべたら本こ］　少年小説。一九六〇年刊。崩壊した家庭を飛び出した主人公カズオは奇妙な老婆の家に連れていかれ、遺産相続の争いの道具にされるが、最後に善意の家庭に引き取られる。既成の秩序に徹底的に反抗する六〇年代の〈現代っ子〉を捉えた作品で、賛否両論を巻き起こした。それ以降の山中作品の原型となった作品でもある。　(砂田　弘)

山中峯太郎　一八八五～一九六六(明18～昭41)　革命家、評論家、小説家、児童文学作家。筆名に吾妻隼人、山中未成、石上欣哉、三条信子ほかがある。呉服商馬渕浅太郎の次男として大阪で生まれ、生後間もなく陸軍一等軍医山中恒斎の養子となった。大阪地方幼年学校から中央幼年学校へ進み、陸軍士官学校(第一八期)を経て陸軍大学校(第二五期)に学んだ。陸大在学中に長編『真澄大尉』が「大阪毎日新聞」に掲載された。早くから中国革命に関心を寄せ、休暇を得て第二革命に参加し、李烈鈞の参謀役として活躍、林虎らの日本亡命を助ける。その間未成の筆名で送った現地報告は東京朝日新聞・大阪朝日新聞紙上に掲載され話題となる。また滝田樗蔭に見いだされて亡命客の匿名で『亡命記』(一九一三)ほかを「中央公論」誌上に発表、革命運動からの離脱後「説苑欄」執筆のきっかけとなる。その後朝日新聞記者として東京で活躍中、淡路丸偽電事件に連座して懲役二年の刑を受ける。釈放後、親鸞とキリストを合体した独自の宗教観に基づき『我れ爾を救ふ』(正伝・外伝計七冊)、自叙伝『否』など多数の宗教書を刊行、一三会という信仰告白の集まりをもち、婦人雑誌などにも執筆するが、一九二六年に『秋の少女へ』を「少女倶楽部」に寄稿したのを機に講談社系諸雑誌に進出、とくに日露戦争中決死の敵情偵察に赴いた建川斥候隊の活躍を描いた実録小説『敵中横断三百里』(三〇)を発表してからは一躍注目を集め、本郷義昭の活躍する『亜細亜の曙』で少年軍事小説の第一人者となり『万国の王城』(三一)などを連載、昭和一〇年代に入ってからは舞台を「幼年倶楽部」へ移して『見えない飛行機』(三五)、『世界無敵弾』(三六)を発表した。中国革命当時を回想した『実録・アジアの曙』(六二～六三)もまとめている。

［亜細亜の曙］　長編小説。一九三一年一月～三二年七月「少年倶楽部」連載。スーパースター本郷義昭が日本征服を企てる〇国の陰謀に敢然と立ち向かう筋立てで、押川春浪以来の武侠小説の流れを引く軍事冒険もの。

【参考文献】尾崎秀樹『夢いまだ成らず』(一九八三　中央公論社)　(尾崎秀樹)

山主敏子　一九〇七～　(明40～　)　児童文学作家、翻訳家。東京都に生まれる。青山女学院専攻部

©1988　日本児童文学学会

卒業後、一九三六年同盟通信社文化部に入社、戦後共同通信社と改組された同社で論説委員となる。五二年ごろより新聞雑誌に短編童話を発表。六二年退職ののちは子どものための著作に専念、意欲的に翻訳、ノンフィクション、伝記、再話に取り組み現在に至る。主な著書に『女性の経済力』(一九四七)、童話集『みつばちの家』(五六)などがある。現在、日本児童文芸家協会理事長。

(浜田けい子)

山内秋生(やまのうち しゅうせい)

山花郁子(やまはな いくこ)　一九三一～(昭6～)　児童文学作家、社会教育家。東京に生まれる。社会党に属した政治家山花秀雄の長女。実践女子大学英文学科卒業。市役所児童婦人課の仕事を経て東京都調布市立西部公民館館長を務める。一方、日本児童文学者協会、日本子どもの本研究会、その他の研究団体に所属し、児童文学の研究、評論、書評活動、および創作と多彩な活動を展開している。著作に『子どもと女と本の世界』(一九八一)のほか、児童文学作品に『わかれ道 おもいで道』(七八)、『かあさんのカギ』(八三)、『12歳ぼくの行動計画』(八五)など多数。

(今村秀夫)

山村暮鳥(やまむら ぼちょう)　一八八四～一九二四(明17～大13)　詩人、童話作家。本名土田八九十(つちだはっくじゅう)。群馬県西群馬郡棟

©1988　日本児童文学学会

高村(現群馬町)の農家の長男として生まれる。複雑な家庭に育ったが、一六歳で堤ケ岡村尋常小学校の代用教員となり、かたわら前橋聖マッテア教会の英語夜学校に学んだ。一九〇二年、同教会で受洗。翌年聖三一神学校に入学した。在学中に文学に目覚め、前田林外らの雑誌「白百合」に短歌を投稿している。一時、戦時補充兵として満州に渡ったが、〇八年に同校を卒業した。以後、キリスト教(日本聖公会)の伝道師として、秋田県湯沢、横手をはじめ、仙台、平、水戸など主に関東、東北地方を転々として布教活動に努めた。その間、一〇年一月、人見東明、加藤介春らの自由詩社に参加。詩集『三人の処女』(一九一三)、『聖三稜玻璃』(一五)、『風は草木にささやゐた』(一八)、『雲』(二四)などを刊行した。とくに『聖三稜玻璃』は近代的苦悩と不安を前衛的手法で表現し、詩史の上で画期的な詩業となった。一九年六月から結核療養のため、妻子とともに茨城*県大洗海岸に移り、聖公会伝道*師を休職。このころ「赤い鳥」に続いて創刊された「おとぎの世界」の編集長井上猛一の依頼を受けて、同誌の童謡欄の選者となる一方、童話『鉄の靴』を連載するとともに、多くの童謡も掲載した。ほかに「雄弁」「少*年倶楽部」「おてんとさん」「日曜世界」などにも多くの童話を発表している。童話集『ちるちる・みちる』(一九)をはじめ、童謡童話集『万物の世界』(二二)、聖書物語『葦舟の子』(二二)、童話『鉄の靴』(二三)、聖者伝『聖フランシス』(二四)、童話集『地獄の門』(二五)などがある。その作風はキリスト教精神を基調とし、「童謡などはその本来からいっても、全然、森や谿間のものである」といい、地方主義を尊重し、農村や漁村の素朴な自然とそこに生きる人や動物を温かいまなざしでみつめ、簡潔にうたいあげている。二四年一二月八日、茨城県大洗で永眠した。

［鉄の靴］てつのくつ　長編童話。一九二〇年二月～一九二一年三月「おとぎの世界」に二四回連載。一九二三年刊。森に捨てられた少年が成長して聖者として仰がれるまでの波乱に満ちた生涯を描いたもので、宗教性を前面に打ち出すとともに、「万物節」ほか数編の農耕、豊饒賛歌の詩の挿入により、理想社会へ向けての再生を強く希求した作で、暮鳥童話の集約的作品といえる。

【参考文献】斎藤正二「山村暮鳥解説」(一九七七　『日本児童文学大系14』　ほるぷ出版)

（和田義昭）

山室　静　やまむろしずか　一九〇六～　(明39～　)　詩人、評論家、翻訳家。父は教職にあり、藤城と号し漢詩人。静はその四男、鳥取で生まれた。早く父を失い厳しい伯母に育てられ、父祖の故郷信州に育ち長野県立野沢中学時代から文学に親しむ。卒業後の代用教員時代、小諸の詩誌「疎林」に参加、一九二七年上京、のちプロレタリア科学研究所に入り、一方独・仏語を独習し、

©1988　日本児童文学学会

やがて評論家、翻訳家として知られる。三六年平野謙らと「批評」を創刊、三八年生活と思想の統一を念じ、東北大学美学科に入学し七年半を仙台で送る。戦後信州小諸に青少年のため高原学舎を設立、また堀辰雄、片山敏彦らを誘い四六年季刊「高原」を創刊。一方「近代文学」同人ともなり上京、北欧文学の紹介に当たり、児童文学ではアンデルセン、ヤンソンの訳業が多い。童話は三三年土方定一の勧めで『現代童話集』に『火山麓の少年』を寄せた後断念していたが、戦後児童文学者協会の塚原健二郎、與田準一らと交わり、研究、翻訳に活躍し、日本女子大学で児童文学を講じ、教え子の同人誌「海賊」を指導した。六一年欧州旅行。『アンデルセンの生涯』(一九七五)は第二九回毎日出版文化賞を受ける。主な業績は『山室静著作集』全六巻(七二～七三)に収められている。現在も門下の「木の花会」で研究・創作の発表を続けている。

(福田清人)

山本和夫(やまもとかずお)　一九〇七～　(明40～　)　詩人、児童文学作家。福井県小浜市に生まれ、東洋大学倫理学東洋文学科を卒業。在学中より詩誌「白山詩人」に拠って詩を書き、また佐藤義美らの童謡同人誌「新童謡」に参加して童謡を書く。一九三七年、日中戦争勃発直後、同人誌に発表したいくつかの評論がとがめられて代々木署に検挙された。拘留二カ月。翌三八年、応召。陸軍少尉として中国大陸を転戦。三九年、除隊。四〇年以降、詩誌「歴程」に作品を発表しはじめる。四一年、陸軍報道班員として徴用されビルマに赴く。現地で太平洋戦争勃発を知る。四三年、帰国。二度にわたる戦争体験により現地の子どもたちの悲惨さを知り、児童文学に関心をもちはじめる。戦後は故郷、若狭に住んで文化活動に従ったが、四七年、単身上京。出版社に勤めながら精力的に詩作を再開。このころ、児童読み物としての伝記、ノンフィクションなどを多数執筆。五五年、児童文学同人誌「トナカイ村」を創刊、主宰する。六四年より母校東洋大学の講師として同短期大学で児童文学を担当。少年詩の代表作としては『海と少年』(一九七五　サンケイ児童出版文化賞大賞)、『シルクロードが走るゴビ砂漠』(八五　第一五回赤い鳥文学賞)があり、児童文学の代表作には『燃える潮』上・下(六四　小学館文学賞)がある。七五年、郷里小浜市門前の古刹、明通寺の境内に谷口吉郎設計による詩碑が建立された。妻は山本藤枝。

(小西正保)

山本鼎(やまもとかなえ)　一八八二～一九四六(明15～昭21)　洋画家。岡崎市に生まれ、木口木版技術を修得後、東京美術学校西洋画科卒業。石井柏亭、森田恒友らと同人誌「方寸」創刊(一九〇七)。「版画」という単語を新造、創作版画を提唱した。一九一二～一六年渡仏。版画「デッキの女」「ブルトンヌ」、油彩「ブルターニュの夏」ほか制作。一七年、日本美術院洋画部同人。一

©1988　日本児童文学学会

八年、戸張孤雁、織田一磨らと日本創作版画協会を設立、翌年第一回展を開くと同時に、義務教育課程における図画教育の在り方を批判、扮本臨画を排して、子どもに見たまま感じたままに描かせ、創造力を引き出す自由画を主張。一九年四月、長野県神川小学校(現上田市)で第一回児童自由画展を開催、日本児童自由画協会(のちの日本自由教育協会)を設立。鈴木三重吉主宰の「赤い鳥」誌上で自由画の選者を続けた。一九年一二月、神川小学校で農民美術運動を開始。二一年「芸術自由教育」誌を創刊(通巻九冊)、義兄北原白秋らと児童芸術運動を推進した。二二年、春陽会創立に参加、三六年、同会を離れて新文展の審査員を務めるが、四三年に復帰した。印象派の影響を受けた穏やかな写実画を発表。この間、二四年、「アトリエ」誌創刊。著書『油画ノ描キ方』(一九一七)、『油絵のスケッチ』(一〇)、『自由画教育』(二一)などのほか、児童向きの『図画と手工の話』『世界美術工芸物語』がある。詩人山本太郎は長男。

【参考文献】小崎軍司『山本鼎評伝』(一九七九　信濃路)

(小崎軍司)

山本忠敬(やまもとただよし)　一九一六～　(大5～　)　イラストレーター、絵本画家。東京都に生まれ、東京美術学校工芸科図案部卒業。絵本の絵に、『とらっくとらっくとらっく』(一九六一)、『しょうぼうじどうしゃじぷた』(六三)、『のろまなローラー』(六五)、絵本の作と絵に、『ずかんじどうしゃ』(七七)、『はたらくじどうしゃ』(八五)シリーズなど。乗り物の絵本が多く、その絵は写実的である。物語絵本では、車の個性に感情を盛り込んで描いている。

(井上共子)

山本直純(やまもとなおずみ)　一九三二～　(昭7～　)　作曲家、指揮者。東京芸術大学卒。オーケストラの指揮・テレビ番組やCMの出演など、その活動範囲はきわめて広いが、本人が最も力を注いでいるのは、歌曲・合唱曲や劇音楽(テレビ・映画)などの作曲活動で、その中でも、子どもの歌に優れたものが多い。主要作品に、『一年生になったら』『こぶたぬきつねこ』『さあ太陽をよんでこい』『夕日が背中を押してくる』、合唱組曲『えんそく』などがある。

(後藤田純生)

山本藤枝(やまもとふじえ)　一九一〇～　(明43～　)　女性史研究家、児童文学作家。和歌山県に生まれ、東京女高師文科卒業。はじめ詩作を志し、一九三二年、処女詩集『近代の晦』を出版。女学校教師、記者などを経て、戦中から戦後にかけては露木陽子の筆名で少女小説や伝記などを執筆。六〇年ごろより女性史の研究に打ち込む。和歌森太郎との共著『日本の女性史』全四巻はその代表作。個人著では『黄金の釘を打ったひと―歌人・与謝野晶子の生涯』(一九八五)の大著がある。児童もものとしては『万葉のうたひめ』(七三)、『細川ガラシャ

©1988　日本児童文学学会

夫人』(七六)など。夫は山本和夫。　(小西正保)

山本まつ子(やまもとまつこ)　一九二五～(大14～)　絵本作家。北海道函館に生まれる。一水会の富田通雄、自由美術の松山文雄に絵を学ぶ。日本児童出版美術家連盟会員。『あきのさんぽ』『えんそく』『コスモスのはながさいたの』『だいちゃんのおんどり』などの絵本作品がある。庶民階層の幼児を健康性・素朴性の強調において描くことに長じており、かつての生活童画の系譜に属すると言うことができる。　(船越晴美)

山元護久(やまもともりひさ)　一九三四～七八(昭9～昭53)　児童文学作家。京都生まれ。早稲田大学独文科卒業。在学中から早大童話会で活躍し、小沢正らと童話研究誌「ぷう」を創刊して独特のユーモラスでテンポのある文体と筋の運びで、童話界に新風を吹き込んだ。卒業後は、童話や絵本の創作に加えて、幼児、子ども向けテレビ番組の台本に健筆を振るい、井上ひさしと共同執筆した『ひょっこりひょうたん島』と『ネコジャラ市の11人』(ともにNHK放映)は、鋭い風刺とナンセンス・ギャグで、子どもにとどまらない幅広い人形劇ファンを育てた。『おかあさんといっしょ』(NHK)、『ピンポンパン』(フジ)など多数の幼児番組を構成し、幼児番組の黄金期を支えた放送作家の一人でもある。童話の代表作として、『その手にのるなクマ』(七三)、『はしれロボット』(六二)、『ピストルをかまえろ』(七〇)など。一九七八年四月、打ち合わせ中に急逝した。マルチ型児童文学者のはしりともいえる。　(片岡　輝)

山本有三(やまもとゆうぞう)　一八八七～一九七四(明20～昭49)　劇作家、小説家。本名勇造。栃木市に生まれ変則な学歴を経て東京大学独文科卒業。在学中より劇文学に関心を深め、芥川龍之介、菊池寛らと第三次「新思潮」を興し、戯曲・劇評を執筆し、劇作家として出発した。『嬰児殺し』(一九二〇)、『坂崎出羽守』(二一)、『女人哀史』(二〇)などによって、近代創作劇に新風をもたらし、その確立に貢献した。小説家としては『女の一生』(二二)、『真実一路』(二五)、『路傍の石』(三七)などの代表的名作を残した。作品は下積みの中から光を求めつづける人間主義的理想主義的生き方を追及して、社会的正義感に訴えるものである。また、小説の中で苦闘しながら生活を拓いていく意志的少年像をしばしば扱っているように、早くから児童・青少年問題、児童文化問題に関心を寄せていた。『小学読本と童話読本』(二六)、『小学読本批判座談会』(二二)に見る当時の国定国語読本へのきびしい批判は、児童読み物の質的向上の主張が実践となって連動していく。『日本少国民文庫』全一六巻(三五～三七)は、『心に太陽を持て』を初巻とする、視野の広い質の高い児童出版で、戦時出版統制前の最後の良心的児童出版であった。戦争が苛烈になるにつれ、子どもたちの本・雑誌の入手が困難に

©1988　日本児童文学学会

なった時期に、邸内に児童図書室「ミタカ少国民文庫」を開設(四二)し自由読書を奨励した。空襲の危険を前に閉鎖(四四)し、文庫図書を栃木と三鷹の小学校に寄贈した。戦後有三は、国語の民主化目ざし「国民の国語運動連盟」を結成、憲法の口語化を進言した。四六年に、児童文化雑誌「銀河」を創刊主宰した。また関連して日本書籍の検定国語教科書(五一～五三)を編集・監修し、教材の執筆もした。いずれ子どもの未来に希望を托す熱意を示す活動であった。四一年、帝国芸術院会員、四七年、参議員文化委員長、六五年、文化勲章受賞。『濁流』(毎日新聞連載、七三・四・四～五・三一)中断中一月一一日に生涯を閉じた。

［路傍の石］ 長編小説。初稿一九三七年一月一日～六月一八日朝日新聞連載、改稿一九三八年一一月～四〇年七月「主婦之友」連載。戦時体制緊迫によって中断した未完の作品。主人公吾一少年が逆境にありながら、母の愛と次野先生の励ましによって生活をきり開いていく向日性の成長小説。貧しさのため中学進学ができず、呉服店に奉公に出されたり、見習工となって希望を見い出していく。作者の自伝的一面を投影している。下村湖人の『次郎物語』とともに少年少女の愛読書となっている。

【参考文献】浅井清「山本有三解説」(一九七七『日本児童文学大系23』ほるぷ出版)、永野賢『山本有三正伝』上(一九八七　未来社)

（滑川道夫）

山脇百合子 一九四一～（昭16～）絵本画家。東京都に生まれ、上智大学フランス語科卒業。旧姓、大村。姉中川李枝子の幼年童話『いやいやえん』(一九六二)に挿絵を描き、絵本『ぐりとぐら』(六三)、『ぐりとぐらのえんそく』(七九)など、中川李枝子とコンビを組むことが多い。素人めいた少女風の絵で背景が無地なのが特色。文と絵に『そらをとんだけいこのあやとり』(八五)。共訳に『のうさぎのフルー』(七七)などがある。

（井上共子）

山姥 山に住む鬼女で、昔話においては、『牛方山姥』『食わず女房』『天道さんの鎖』などに登場し凶暴な人食い鬼的な面をみせる。『山姥と桶屋』の山姥は、人間の考えていることをいい当てる力をもっているが、火中の木がはじけて当たるなど考えていなかったことが起こると、恐れて退散する。伝説では、山に迷い込んだ者を助けたりする優しさを表すものもある。信州の上籠山に住む山姥は、坂田金時の母と伝えられ、世阿弥の謡曲『山姥』にもうたわれている。山の神の巫女の零落した姿であるとの説もある。

（福原登美子）

弥吉菅一 一九一一～（明44～）近世文学研究家、国語教育、児童文学研究家。福岡県浮羽郡に生まれる。広島文理科大学卒業。郷里の小学校に勤

©1988　日本児童文学学会

務。ここでの児童詩教育、童話・童謡の創作指導がのちの研究活動の基礎となった。大阪池田師範(現、大阪教育大学)で教員、研究者の養成指導に力を尽くした。大阪教育大学名誉教授、梅花女子大学教授。研究業績は、俳諧研究においては『野晒紀行諸本の系統序列の研究』をはじめ研究論文多数。国語教育関係にあっては、児童詩・読書指導の論稿が多く、『童詩の研究—自由詩の学習と指導体系』(一九五〇)、『日本の児童詩の歴史的展望』(六五)などの著書があり、主体的児童詩の開発に努めたことでも知られる。その長年の国語教育活動によって博報堂賞受賞。『日本児童詩教育の歴史的研究』で学位を授与された。『日本児童詩教育における創作指導の歴史的研究』全三巻(八六)に総括的に叙述されている。早くから児童文学の学的樹立を提唱、日本児童文学学会設立やわが国の大学での児童文学講座開設に尽力した。

(大藤幹夫)

ヤング シャーロット・M Charlotte Mary Young 一八二三〜一九〇一 イギリスの作家。ハンプシャー州オターボーン村で、ジョン・ケブル師の指導のもとで日曜学校の教師をし、その活動を援助するため、一八五一年、若い婦人向きの雑誌「マンスリー・パケット」の編集に従事するかたわら、物語を書きはじめた。『*The Heir of Redclyffe* レッドクリフの相続人』(一八五三)は、一九世紀半ばで最もよく読まれた物語である。『*Little Duke* 小さな君主』(五四)は、歴史物語、一一人兄妹の子どもの性格描写で知られる『*The Daisy Chain* ヒナギクのくさり』(五六)は家庭物語のそれぞれの先駆的作品となった。

(三宅興子)

ヤング・アダルト文学 ヤング・アダルト ぶんがく 主として中学・高校生を読者対象として意識し執筆・刊行される文学。「ニュー・アダルト文学」という場合もある。第二次世界大戦後アメリカの公共図書館でティーンエイジャー(一三〜一九歳)に使い出したことばといい、日本では一九七九年にヤング・アダルト出版会が結成されており近年関心が高まってきた。自己存在への不安、性や愛への目覚めと苦悩、社会への関心、複雑な人間関係についてなど自分の世界の内外両面に問題を抱えた日常を描き、問いかける作品が多く、晶文社『ダウンタウンブックス』や岩波書店『あたらしい文学』などいわば問題小説が出ているが、日本の読者にはあまり受け入れられていない。また理論社『10代の本セレクション』は民話・古典・ノンフィクションも含んでいる。これら意識的な翻訳シリーズがある一方、出版社によっては既刊の創作や絵本の寄せ集め的分類もみられる。年齢層の区分や、作者・出版社側の問題提起・伝達意識が先行しがちな段階といえる。現在の日本のヤング・アダルト層の意識の在り方に即した問題設定や手法を探り作品化すると同時に、実際の彼らの読書

©1988 日本児童文学学会

状況やほかのメディアの享受の仕方をジュニア小説、SF、ファンタジー、アニメその他も含んで捉え、この分野を考える必要がある。さらに、読者年齢の設定とその対象作品の中味と実際の読者層の関係や、造本の在り方など、常に児童文学全体で、また成人文学とも絡め考えるべきだろう。

（佐藤宗子）

ヤング・ヒーロー young hero　童話や神話の主人公として登場する少年英雄。普通この種の物語では、英雄の誕生、成長にまつわるさまざまなでき事、竜などの怪物退治そのほかの中で課せられる多くの試練、そしてその試練を乗り越えて、宝物を手に入れたり、美しい姫と結婚をする、といった形をとる。アイヌ・ユーカラの主人公ポイヤウンペなども、その典型的な一例である。ただ最近では、創作児童文学の作品についても、この呼び名が使われることがある。

（安藤美紀夫）

ヤンソン トゥーヴェ Tove Marika Jansson　一九一四～　ヘルシンキ生まれのフィンランドのスウェーデン語系女流作家、画家。彫刻家の父と商業デザイナーの母という芸術的家庭環境に育つ。ヘルシンキ、パリで絵画を学び画家として認められる。若くから漫画を趣味に描きイギリスの新聞（一九三九～）に発表、当時すでに後年の童話の主人公「ムーミントロール」の絵を自身のサインとして用いた。トロールは北欧民話に由来する森の妖精で、ヤンソンはそれを独自のイメージに創造して、ムーミン谷を設定し中心にムーミンと名づけたトロール一族を置いた。ムーミントロールのシリーズは全八巻（四五～七〇）でヤンソンの代表作である。最初短編童話『小さいトロールと大洪水』（四五）を出版し、これが全八巻の序作となる。次の『*Kometjakten* 彗星』（四五）、その改訂版の『ムーミン谷の彗星』（六八）が事実上の第一作といえる。ヤンソンが童話作家として国際的声価を得たのは、第二作『たのしいムーミン一家』（四九）である。第三作は『*Mumintrollen bravader* ムーミンパパのおてがら』（五〇）、改訂版は『ムーミンパパの思い出』（六八）である。第四作『ムーミン谷の夏まつり』（五四）、第五作『ムーミン谷の冬』（五七）、第六作『ムーミンパパ海へいく』（六五）、第七作『ムーミン谷の十一月』（七〇）で長編童話ムーミンシリーズの最終巻となる。しかしもう一作短編集『ムーミン谷の仲間』（六二）を加えて全八巻と呼ぶ。全巻を貫く思想は恐怖と安堵の交錯する世界で、自由、正義、愛と勇気をもって守る行動と精神の尊重である。登場人物の愛嬌とユーモラスな挿絵は文章と同等の筆力で読者を納得させ魅了する。北欧の清冽な自然の中で展開する数々の物語は作者の柔軟な想像力により高度なファンタジー文学になっている。国際アンデルセン大賞をはじめ多くの内外の賞を

©1988　日本児童文学学会

受賞。ほかに『さびしがりやのクニット』(六〇)など絵本が三作と大人向きエッセイが多数あり、『彫刻家の娘』(六八)、『少女ソフィアの夏』(七一)は代表作。

(坂井玲子)

ユ

湯浅芳子(ゆあさよしこ) 一八九六〜 (明29〜) 露文学者。本名ヨシ。京都に生まれる。日本女子大学校、早稲田大学露文科で学ぶ。一九二七〜三〇年の間、宮本百合子とともにモスクワ留学。帰国後ロシア文学の研究、紹介に携わる。主な訳書にチェーホフ*の『桜の園』『かもめ』『三人姉妹』、ゴーリキー*の『幼年時代』、マルシャーク*の『森は生きている』(一九五三)、『魔法の品売ります』(六六)などがある。

(北畑静子)

ユーイング ジュリアーナ Juliana Ewing 一八四一〜八五 イギリスの童話作家。幼くして話上手で「ジュディおばさん」と愛称された。母ギャティ夫人が「ジュディおばさんの雑誌」(一八六六〜八五)を出し、ユーイングはそれで多数の作品を発表。『ティモシーのくつ』を含む『*The Brownies and Other Tales* ブラウニーズとその他の短編集』(七〇)が代表作。表題作からジュニア・ガール・スカウト*の愛称ブラウニーズが出た。現実物語も妖精物語*も書き、生前は人気抜群だった。

(吉田新一)

結城ふじを(ゆうきふじお) 一九二五〜 (大14〜) 童謡詩人。本名芙二男。山形県に生まれる。山形工業学校卒。歌人の父や童謡詩人の兄結城よしを*の影響を受け、音楽への興味も手伝い、童謡の詩作をはじめる。兄の戦病死によって休刊した、山形県の童謡誌「おてだま」を四八年に復刊、主宰する。息の長い地方誌として評価され、日本詩人連盟・日本作詩家協会の同人賞、また六〇年度の日本童謡協会賞を受ける。詩謡集に『青春手巾』(一九五二)がある他、童謡に『豆っこ打ち』『つんとうつらら』(共に中田喜直作曲)、『ゆかいなまちのふうせんや』(冨田勲作曲)などがある。

(羽曽部 忠)

結城よしを(ゆうきよしお) 一九二〇〜四四(大9〜昭19) 童謡詩人。本名芳夫。山形県の生まれ。一九三四年市立第四高等小学校を卒業後、山形市の八文字屋書店の住み込み店員をしながら、童謡をつくった。三八年童謡誌「おてだま」を創刊。のち、陸軍船舶一等兵として出征、四四年小倉陸軍病院にて戦病死。代表作に『ナイショ話』『峠の仔馬』など、遺稿集に『月と兵隊と童

©1988 日本児童文学学会